



Title	アメリカ：公衆衛生の検査部門を見て
Author(s)	尾山, 静夫
Citation	大阪公衆衛生. 1971, 27, p. 20-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84307
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



海外みてある記

海外の公衆衛生事情については、本誌においても、過去に「公衆衛生マンが外国を旅して」（1966年10月号）、「想像と現実」（1970年1月号）などにおいてとりあげられているところでありますが、今回は紀行文風に次のお二人に執筆していただきました。

アメリカ

— 公衆衛生の検査部門を見て —

尾 山 静 夫

伝染病センター性病研究所

VDRL Department of Health, Education, and Welfare Public Health Service National Communicable Disease Center U.S.A.

1970年夏、性病研究所所長 L. Norins, M. D. の招へいがあり約3週間、ジョージア州のアトランタでお世話になった。着いた日が、摂氏39.5°、ロスアンゼルスから約3時間だが、時差が3時間起っている。

土曜日であるにもかかわらず、Dr. Norins 所長自ら出迎えてくれる。恐縮する。街から30マイル程郊外で、エモリー大学の隣の静かな環境の中に研究所がある。研究所公用としてすぐ近くのホテルが予約されており、案内して下さる。

アトランタは美しい街であるが蒸し暑く、黒人が多い。研究所のドクター連中はゆっくりしゃべってくれるが、ここで生まれて育った人の話は解ったものではない。なまりには悩まされ通しであった。

テーマは「病原性トレポネーマ感染症（梅毒）の疫学」で、昼間はディスカッション、夜は滞在中毎日といてもいい程所長あるいは部長、室長等が自宅またはいろいろなところに招待をして下さり大いに見聞を広めることが出来た。（昼間の方はあまり大した研究をしているように見られなかった。）

ただこんな事を言ったら叱られるかも知れないが、日本の役人で働かない人があるが、より以上にこの研究所の職員、特に女性は働かない。ちょうどサマータ



（性病研究所）



（ノーリンス所長（写真右）と私）



(アトランタ市、ピーチ・ツリー・ストリート)

イムであったので8時に出勤して、ゴタゴタと室の整理等で何か始めようとする。10時のコーヒ・ブレイク。キャフテリアに行くと1時間あまり、どこかのスーパーマーケットが安いとか、今日は何ポンドやせた、肥ったのとやかましいことおびた。すぐランチタイム。5時には身仕度が出来ていて直ぐ御帰還。男なら5分帰宅が遅れるについても妻君に電話で了解を求めねばならぬ。私は毎晩10時過ぎになるが、電話なんかした事がないと言うと、君はアメリカならとうに離婚されていると言われた。

そんな事で妻からとやかく言われたら、ブンなぐるんだとオーバーに言う。今度は君は刑務所行きだと宣言される始末。日本男性でよかった。

日本の性病とアメリカの性病とを比較すると、考え方からして全然違うので、意見を統一して話をする事が非常に困難である。

郡の保健所に相当する所で性病部があり、その中には性病予防官？を大学卒レベルで教育している。それらが患者を呼出すと90%以上は検診に来る。回虫を持っている人は極端に隠そうとするが、梅毒は隠さない。呼出しを受けた既婚の婦人(夫も子供もある)が来て、オリエンテーションを受ける時に、この1ヵ月間に接触した男性は？と聞かれて、10人程名を挙げているのには恐れ入った。(この婦人は別に売春婦ではないようだ)

日本では顕症梅毒は殆んどなくなり、血清学的に見付かった者が大部分である。アメリカでは黒人にトレポネマ(梅毒の病原菌)が住み易いのか顕症梅毒がすごく多い。また、暗視野顕微鏡で病原菌が見え、症状のあるのが梅毒であってそれ以外は梅毒でないという。

確かにそうかもしれない。研究所の人に、いまアメリカではこれだけ梅毒があるから症状のないものは放置するのだが、日本のように、抗体のみ持っている者が、1.5~2.0%、しかも顕症梅毒がなく、血清学的に

のみフォローアップ出来る平和な世になれば、あなた方もそれらを梅毒として扱わなければ失業するだろうと言ったら、苦笑していた。

半日で100人位の顕症梅毒、淋病患者をみていると、アメリカの、この混乱(殊に南部だったからかも知れないが)に比して日本は冷静で平和そのものに見える。このパートに働いている若い医師が、ここ(政府機関)で2年働けばベトナムに行かなくて済むのだと話してくれた。

研究所には毎週1回給料を配るだけの専任のオバさんがいるかと思えば、灰皿の灰を1日2回捨てにくるだけの専任のオバさんがいる。勝手に紙くず籠を捨てに行ったら、あなたは他人の仕事を取り上げるのかと言って叱られた。その黒人のオバさんが新聞でアパートを見付けて交渉に行ったら、満員だと言って断られたそうだが、次の日も次の日も新聞にはそのアパートの広告が出ていた。

われわれが日本で開発した梅毒の診断法のTPHAという方法をここでも採用していたが、それを自動化したものを標準法としていた。

サンフランシスコ、ロサンゼルス等は非常に住みやすいが、アトランタは湿気が多く蒸し暑い。だが「風と共に去りぬ」で有名な桃の木通り、古戦場等非常に美しい町であった。研究所では性病以外の部門には顔を出さなかったので知らないが、あまりにも恵まれ過ぎている。チンパージーもふんだんに使え、チンパージーの飼料代の方が飼育している黒人の給料より高い。

しかし、日本と異なり梅毒検査の試薬は全部ここで検定しており、アメリカ合衆国内で使われているものは統一されている事が非常にうらやましく感じられた。

アトランタからレンタカーで、ニューオーリンズを経てグランドキャニオン、ロサンゼルスまで2000キロ余り旅を続ける。

バイオ・サイエンス研究所

Bio-Science Laboratories (1970)

アメリカにおける医療産業が鉄鋼産業を追い抜くのは日時の問題だと言われている。

ご多分にもれず、この研究所(検査所)は大資本の傘下(Dow chemical Co.)にあり、所長はDr. Henry (Clinical chemistryの編集者)で500人余りの従業員がいる大きな研究所兼検査工場のような感じがする。

この研究所はロサンゼルスからビバリーヒルの峠を越えて行った所にあり、庭の美しい2階建の大きな

建物である。

各検査室の日常業務はほとんど自動化され、受付→キーパンチャー→仕分け→検査→カードパンチ→データプロセス→報告と極めてスピーディーに正確に処理されていた。生化学関係では、廊下に精度管理表が掲げられていたが、それは Tonks の方式によっているのはいささか甘過ぎる感じがあったが、別に気にしていないようであった。

しかし、検体の多くは、遠くフロリダ、テキサスからもどんどん毎日送ってきており、空路の発達がここでもみられた。

検査技師学校

School of Medical-Technology Grady Memorial Hospital (アトランタ)

School of Medical-Technology Tripler Army Hospital (ホノルル)

私の勤務しているのと同種の学校なので、期待して、昨年は Grady Memorial Hospital (アトランタ市) の検査技師学校等を、今年は Tripler Army Hospital (ホノルル市) の検査技師学校等を訪問した。

アメリカ合衆国にはこの種の学校が500余りあるが、1,000病床以上ある病院でも学生数は10人~20人



(GRADY MEMORIAL HOSPITAL)



(GRADY MEMORIAL HOSPITAL SCHOOL OF Medical-Technology 学生寮一中に住んでいる学生は18人)



(TRIPLER HOSPITAL 学生実習)

である。看護婦の養成にしても然りである。アメリカでは、教育は大学で、その卒業した者に対して専門的な教育というより、むしろ職業訓練を行なっている。

私達はいま、日本における医療技術者の教育を大学レベルにおける教育にすべく努力している。アメリカのようにすれば、いまの日本におけるこの種の養成課程で、教育でも職業訓練でもない、どっちつかずの矛盾が解決出来るのではないだろうか？ 先進国は勿論、韓国でも台湾でもアメリカ合衆国の例にならっている。

私のいま在職している学院の衛生検査部は、もうれつなハード・トレーニングである。2年間で約3560時間の講義と実習を行なっている(大体4年制の大学の4年間の授業時間)が標記のこの2校では1年間で2000時間授業を行ない、1人の実習生に2人の指導者がついていて、1年を通じて休暇は8日間しかない。午前7時から午後4時までビッシリつまっている。しかも、他の大学と同じく、毎週といっている程テストテストの連続である。

しかし、学生達は明るい。ある日、学生達の希望で公開討論会にひっぱり出された。テーマは「今世紀における医療産業の情報科学時代において占める地位」という題である。公開討論会であるから各発言者のしゃべる事は何とか解る。

しかし、それをアメリカ人の考え方によって理解しなければ、発言を求められた場合、話しても理解してもらえない。海洋産業の中の医学の占める役割、宇宙産業における医学の占める役割、延べ30時間程、真剣な討議がなされ、むしろ私自身の勉強であるような感があった。

医療のあり方について発言を求められた時、私が昔医学校時代好きであった教授から教わったヒポクラテスの倫理を、こんこんと(?)述べ、人間の生命の尊さ、人間の世界は一つと語ったところ、理解してもらえたようで嬉しく感じられた。



(HYLAND LAB. EDPS室)

ハイランド研究所

Hyland Laboratories

会長の招へいがあり、ハイランド研究所を訪れた。この研究所はロスアンゼルスから東南に30マイル程へだたた農園の中にあり、静閑な所にある。1970年に建てられた、昔の日本の軍艦を思わせるような4階建ての黒いずっしりした大きな建物である。

3階の大部分は将来に備えて空白である。1階の大部分は情報処理システムの電算機がスペースの大半を占めている。日本でRh式血液型検査に用いられるRh(D)の抗血清はここで生産されたものが多く輸入されているが、それは日本では法律でRh(-)の人を免疫することが禁じられているからである。ところがこの研究所では堂々と、莫大な保険と賃金を払って人そのものを免疫して抗血清を作っている。

先に書いた性病研究所でも所長と梅毒の偽陽性の問題をディスカッションしているとき、金を払って梅毒の偽陽性にかからせてはどうだと私にいと簡単に言う。その時ボランティアを求めて………と言うが、私の考えているボランティアとは大部意味が異なる。果して日本とアメリカでどちらが人権を重んじているだろうか？ 日本では法律で生体実験等は禁じられている事を理解してもらうのに多くの時間を要した。

ハイランド研究所も大資本の傘下にある。物と、人と、金をふんだんに使って開発している。これをもし日本人が占めて仕事をすれば、何倍かの成績が上るだろうなんて自分勝手なことを考えていた。

(大阪府立公衆衛生学院・

衛生検査部兼臨床検査部主任)